

プロセスノートから読むフロイトと精神分析
—フロイトの自己分析と「鼠男」症例の重なり—

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
植村友博

本研究は、フロイトのプロセスノートから、フロイトと精神分析の本質に迫ることを目的としている。そのために本論は、プロセスノートを土台に、フロイトの自己分析と「鼠男」症例を比較しながら組み合わせて考察している。

第一章では、フロイトが考えた精神分析技法における記録の位置づけと、現代で考えられている精神分析機能としてのプロセスノートの位置づけを検討した。まずフロイトが打ち立てた精神分析技法を概観し、技法論文からフロイトが記録をどのように捉えていたか詳述した。フロイトはセッション中に書かないことによって、自由連想を保障することを見出したが、後で思い出しながら書くことの意味は論じなかった。現代では、分析記録はプロセスノートと呼ばれ、分析を構成する本質的要素であると考えられている。それは単なる記録媒体としてではなく、セッションを再体験し、患者の転移と分析家の逆転移に気づき、新たな視点からセッションを再編成する機能である。さらに筆者は、プロセスノートには、分析家自身の洞察が得られる自己分析の機能もあると考えた。ただし、自己分析は事前に分析を受けていないと不十分に終わることと同様に、プロセスノートも分析を受けていないと機能させることができない。フロイトは分析を受けていないため、自己分析でもプロセスノートでも十分な洞察を得ることができなかった。

以上の点を例証するために、第二章では、フロイトのプロセスノートが唯一現存している「鼠男」症例と、フロイトの自己分析を比較した。両者にはフロイトの防衛の範囲内で行われているという類似点が見出せた。自己分析で知性化が働いたように、フロイトは本症例でも患者の連想に対して知的説明を与えることで反応し、患者の連想を損ねた。患者はフロイトへ敵意や怒りを露わにしたが、患者の転移に鈍感なフロイトは、それらをうまく扱えず、プロセスノートで振り返って気づくこともできなかった。自身への洞察が不十分であったフロイトは、自己分析の結果を本症例に重ねてしまい、患者をありのままに理解することができなかったのである。

本症例から、フロイトといえども分析を受けていなければ、自身の防衛や葛藤を超えて患者を分析することは不可能であることがわかる。プロセスノートを機能させるためには、かつ分析を機能させるためには、分析を受ける必要があることを、彼は身を以って証明した。フロイトが発明した精神分析は、いつの間にかフロイトを超えていたのである。